

奈良時代の浄土庭園 ～阿弥陀浄土院とその前身たる観無量寿院～

小野 健吉

(奈良文化財研究所文化遺産部長)

1. 寺院と池

6世紀の仏教伝来以来、飛鳥寺や大官大寺などを始めとする飛鳥・藤原京の時代(592-710)の寺院には、伽藍を構成する要素として池を含むものは確認されていない。奈良時代(710-794)になると寺院境内地のなかに池を含むものが現れる。今もその姿をとどめ、奈良でも指折りの名所となっているのが、興福寺の猿沢池である。しかし、猿沢池は中心伽藍の南門の外側の、元来は南花園と呼ばれた標高の低い区画にあり、従来の谷筋の湿地を利用した池である。その役割は区画の名の示す通り蔬菜の栽培であり、多雨時には調整池的な機能も果たしたと考えるとよいだろう。もちろん、寺院境内の池であることから、放生池的な機能を果たしたことも想像できる。もう一つ、奈良時代の寺院境内の池として記録に残るのが、大安寺の池である。大安寺境内の北東部には、周濠を伴った全長154mの前方後円墳・杉山古墳があるが、天平14年(747)の『大安寺伽藍縁起並流記資材帳』には、墳丘と周濠が「池並岳」として記されている。これらは、境内の中の庭園的な性格で用いられたことも考えられるが、当然のことながら、この池も大安寺創建時にはすでに存在したものであり、その位置から考えても、仏堂と一体的に取り扱われたものではなかった。これらに対し、仏堂と園池が一体となっていたことが確実なのが、阿弥陀浄土院である。

2. 阿弥陀浄土院とその前身

阿弥陀浄土院は天平宝字5年(761)に光明皇太后

(奈良時代初期の最有力貴族である藤原不比等の娘、聖武天皇の皇后)の一周忌齋会のために、法華寺の一角に造営された寺院で、本尊は阿弥陀如来である。平城宮東院庭園のすぐ東隣にあたる跡地には花崗岩の立石が地上に残されており、江戸時代の地誌『和州旧跡幽考』にも記されているように、古くからここが阿弥陀浄土院の跡地であると伝えられてきた。平成12年(2000)に奈良国立文化財研究所が実施した発掘調査では、中島のある曲池や池の中に立つ礎石建物ならびに廊橋の遺構が見つかった。全貌が明らかになったわけではないが、これらが阿弥陀浄土院の遺構であることは、出土遺物などから考えても疑いのないところである。さらに、その礎石建物の前身と見られる掘立柱建物の遺構も池の中で見つかり、これについては、光明皇太后の母(不比等の妻)である縣犬養橋三千代が建立した「観無量寿堂」(石山寺所蔵『如意輪陀羅尼經』の跋語に記載)を中心とする区画(以下、「観無量寿院」と仮称する)に伴うものと考えるのが妥当であろう。観無量寿堂という名称は、阿弥陀經・無量寿經とともに浄土三部經の一角をなし、十六観(阿弥陀仏の極楽浄土に往生するための16の観法)を内容とする観無量寿經によることは言うまでもない。観無量寿經を絵画として表現した「観經變(観經變相)」は極楽浄土の情景を中心としてその外縁部に十六観の図などを配置したものであるが、こうした観經變が観無量寿堂の内部に掛けられていたことも十分に考えられる。ちなみに、十六観のうちの第五観は宝池観(極楽の宝の池を観ずる)、第六観は宝樓観(極楽の宝の樓閣を観ずる)で、さらに、第十四～十六観は往生する衆生の

行状などが9段階に分けて描かれる「九品段」である。

3. 不比等邸を踏襲した観無量寿院

このように観無量寿堂がその名のとおり観無量寿経信仰に根ざした仏堂であったと考えると、観無量寿院が池を伴った仏堂という構成をとった理由がよくわかる。まさに、観経変に描かれる極楽浄土を具現しようとしたわけである。それでは、観無量寿院の池は三千代による観無量寿院建立の際に新設されたものであったのか。結論的に言うと、それは、不比等邸であった時代の園池を引き継いだものであったのだろう。『正倉院文書』には、不比等邸を踏襲した法華寺の中に「中嶋院」「外嶋院」という二つの写経所区画があったことが記されており、これらはその名称から園池を含む区画であったと考えられている。不比等邸の園池区画が観無量寿院となり、法華寺の時代におそらく「外嶋院」と呼ばれるようになって、最終的に阿弥陀浄土院となった、これが私の考えるこの場所の履歴である。そして、不比等邸の時代から続く園池を引き継いだものと見れば、観無量寿院の池が観経変に描かれる極楽浄土の宝池のような幾何学的輪郭を持つものではない理由がわかる。不比等邸の園池が平城遷都と軌を一にして盛行する、唐起源の曲池・景石を基調とした宮廷・邸宅系のものであったからだ。観無量寿堂の建立にあたって、曲池から幾何学的輪郭を持つ池に改修することも不可能ではなかったかもしれない。しかし、不比等の時代からの池をあえて改修する必要性が感じられず、むしろ当時の最高の意匠を持つ園池の景色をよしとしたものと推測しておきたい。そして、観無量寿院から法華寺「外嶋院」に転用された敷地をさらに踏襲して造営された阿弥陀浄土院についても、建物は掘立柱から礎石建物へと新造したものの、園池については基本的に大きな改修は加えず引き継いだと考えてよいだろう。阿弥陀浄土院の造営は、皇太后の一周忌齋会といういわば国家的な事業であり、そこでも不比等邸以来の園池が残されたということ

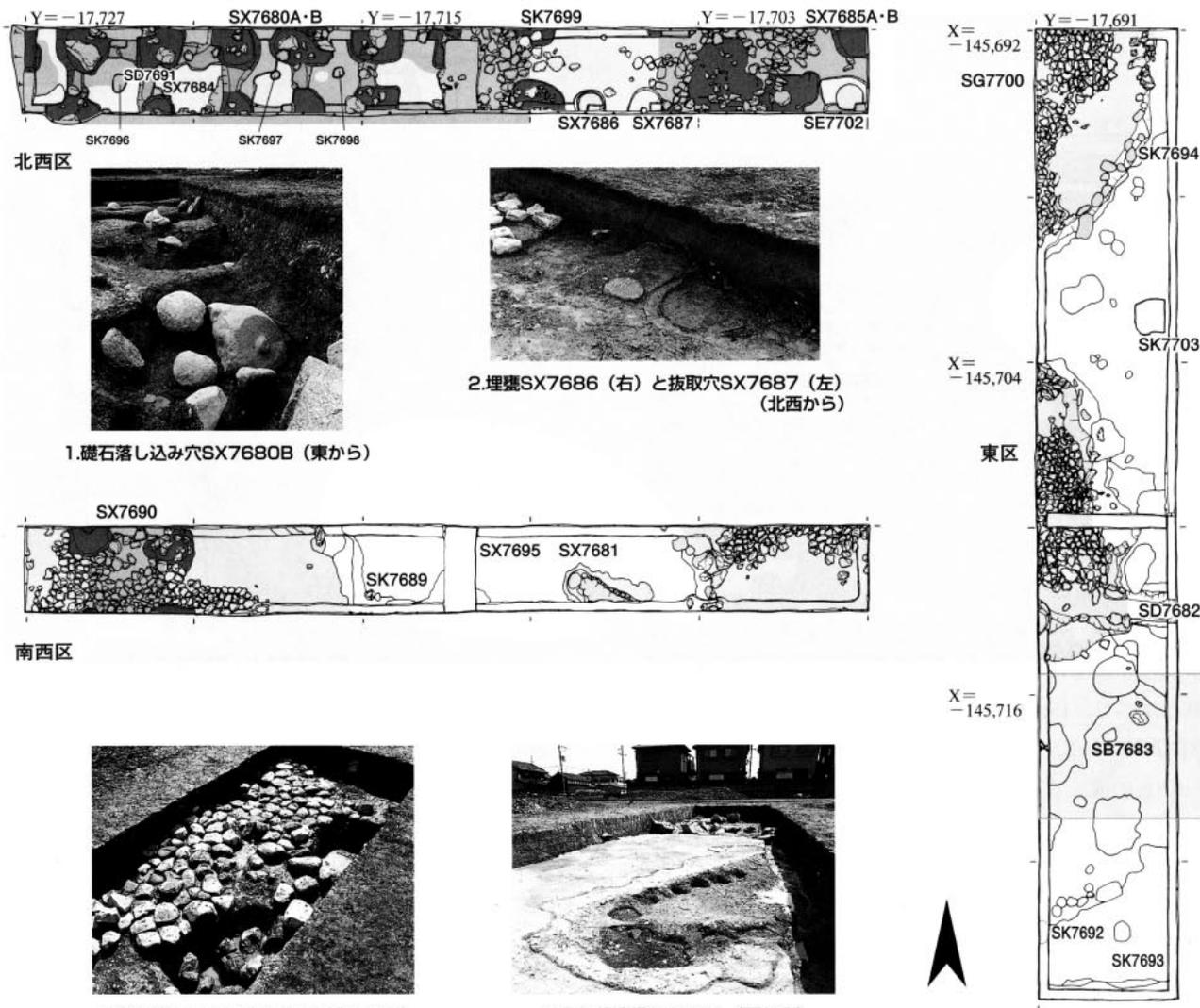
になれば、このタイプの園池が極楽浄土を象徴するものという意識が明確にあったと解釈することもできる。

4. 日本における浄土庭園の嚆矢

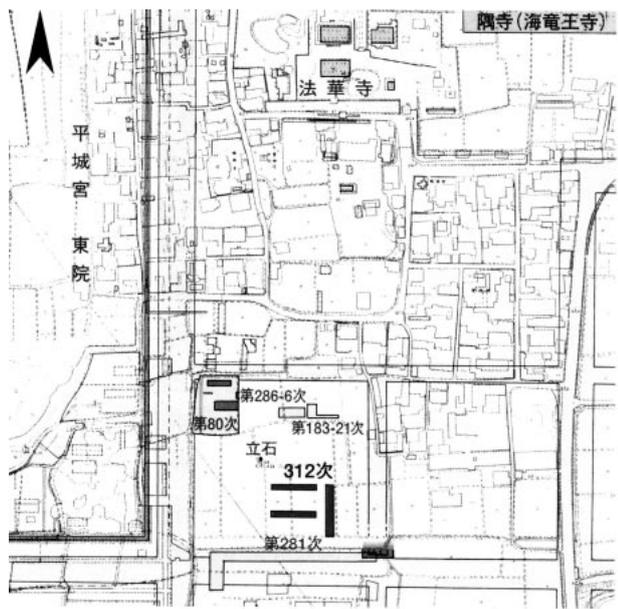
ここまで、かなり大胆な推測を含めて、論を進めてきた。これが大きく外れていないとすれば、阿弥陀浄土院の前身たる観無量寿院こそが、仏堂と園池が相まって浄土を表現した屋外空間、すなわち浄土庭園の嚆矢と見ることも可能であろう。そして、重ねて強調しておきたいのは、観無量寿院あるいは阿弥陀浄土院の空間構成が阿弥陀仏の極楽浄土をイメージしたものであったこと、ならびにその園池デザインが奈良時代の宮廷・邸宅系のものであったことである。なぜなら、この2点が、平安時代以降の浄土庭園造営思想の底流となり、日本における浄土庭園を考える上で、見落とすことのできない論点と考えられるからである。

参考文献

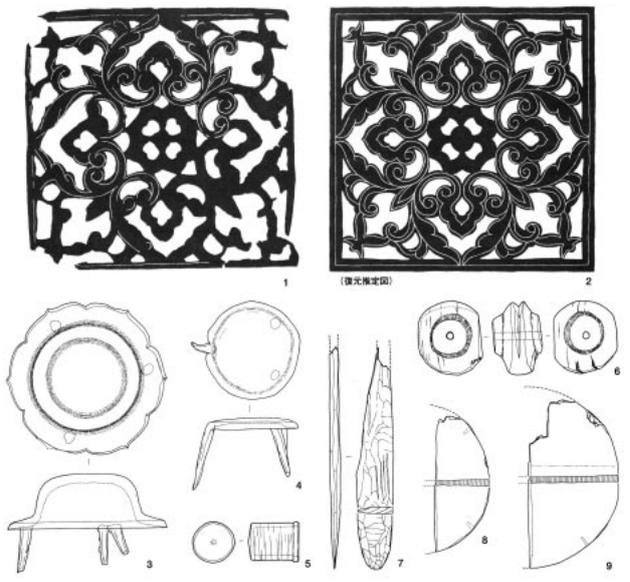
- 1) 清野孝之ほか 「法華寺阿弥陀浄土院の調査」『奈良国立文化財研究所年報』2000・Ⅲ, 2000
- 2) 渡辺晃宏 「阿弥陀浄土院と光明子追善事業」『奈良史学』18号, 2000
- 3) 東野治之 「橘夫人厨子と橘三千代の浄土信仰」『ミュージアム』565号, 2000
- 4) 岸俊男 「嶋雑考」『日本古代文物の研究』塙書房, 1988
- 5) 加藤優 「『如意輪陀羅尼経』の跋語について」『石山寺の研究 深密蔵聖教篇・下』法蔵館, 1992
- 6) 中村元ほか編 『岩波仏教辞典(第二版)』岩波書店, 2002
- 7) 大西磨希子 『西方浄土変の研究』中央公論美術出版, 2007
- 8) 小野健吉 「浄土庭園の諸相」, 金子裕之編『古代庭園の思想』角川書店, 2002
- 9) 小野健吉 『日本庭園 - 空間の美の歴史』岩波書店, 2009



図一 発掘調査平面図と主な遺構



図二 発掘調査位置図



図三 出土遺物

※本ページの図版は、「法華寺阿弥陀浄土院の調査」(『奈良国立文化財研究所年報』2000・Ⅲ, 2000)による。